

社会科・地理歴史科教育法における模擬授業の状況

A study of the current situation of Simulated lessons under Teaching Methods of Social Studies and Geography-History

稲田 克二

Katsuji INADA

（要旨）

社会科・地理歴史科教員免許取得のための教職科目である社会科・地理歴史科教育法において、実際に授業を行うための知識・技術の習得は非常に重要である。その際広く用いられている指導方法の一つに模擬授業がある。この模擬授業に関する研究・報告は多数あるが、本稿では筆者が行っている指導方法を示した。

まず、模擬授業を行う際に必要な「技術や作法」として習得しなければならない事項である、①授業の目的の明確化、②適切な授業内容の立案・実施、③生徒の授業理解への工夫、④生徒の学習への意欲付け、⑤生徒の状況把握、⑥授業環境の整備 の6点の指導を行い、次に1、「声は大きく、話し方には抑揚をつけて」などの実務的な注意事項を示し、学生に模擬授業のやり方を体得させている。

さらに、その模擬授業の評価表を作成させ、模擬授業実施者に対して客観的な評価を行うとともに、受講生が模擬授業を行う際に理解しなければならない技術や手法を習得させている。

キーワード：模擬授業、授業技術、評価方法

Key Words : simulated lesson, teaching skills, evaluation methods

はじめに

教員養成にかかわる教職科目の中で、実際に授業を行っていくために必要な知識・技能・意識等を習得させるための教科教育法において、指導方法として模擬授業の手法が取り入れられている場合が多い。そのため、この模擬授業の指導法に関する研究も多数なされている。例えば、服部¹⁾は国語科教育法で、長谷川²⁾は保健体育科教育法で、大前³⁾は英語科教育法でそれぞれ、模擬授業の位置づけや実施方法などを述べている。

社会科・地理歴史科教育法では、小松⁴⁾が世界遺産を教材とした指導法について、太田⁵⁾が模擬授業を行うための具体的指導法について、木下⁶⁾が社会科授業論の中での模擬授業の状況を、岩野⁷⁾がグループワークで模擬授業をさせる時の学生の「居場所感」について、それぞれ報告がなされている。特に小松と太田の報告は、模擬授業の具体的な手法や、やり方についての実践報告として示唆に富んだものとなっている。

筆者は、2012年度から神戸学院大学において社会科・地理歴史科教育法を担当しており、これに関して、この授業の開設状況、受講者の状況、授業内容の概略、受講生の意識、今後の課題などについて、教職教育センタージャナル第2号⁸⁾にまとめた。

しかし、同稿では、研究の目的を受講生の意識に置いていたため、この授業の最大の目標である受講生を社会科・地理歴史科教師として、授業が実施できるように指導・育成する模擬授業演習に関する詳細な記述はしなかった。

そこで今回はこの授業の大きな柱である模擬授業演習に焦点を当て、模擬授業の指導方法と実施状況、及びその課題を報告することとした。

1. 模擬授業の概要

1-1. 模擬授業の位置づけ

この授業の年間計画では、学習指導案の作成と模擬授業演習に重点を置き、特に模擬授業を行うことに多くの時間を配当している。これはこの授業の目的が、社会科・地理歴史科教師としての実践的能力を育成することを最大目標としており、受講生が社会科・地理歴史科教師として、適切で魅力的な授業ができるようになるための知識・技術・意識・意欲を指導・育成することが最終的な目標であるからである。そのため、授業では具体的・実践的な指導に重点を置き、授業を行うための「技術と作法」を受講生に習得させることを中心として指導している。そこで、本稿ではこの授業で行っている模擬授業演習について論及する。

1-2. 模擬授業のやり方の指導方法

受講生に模擬授業をさせる際、事前に指導をせずに自由にさせると、多くの場合次に示した2通りの模擬授業をする受講生がほとんどである。

まず第1は、教科書の解説・説明をすることが授業であると考え、生徒に教科書を読ませ、ただその文言の解説・説明をし、太字で示された用語が重要であるので暗記するようにと指導するだけの授業である。

次に多いのは解説・説明事項を列記し、「重要事項」を空白部にした「穴埋め作業」のワー

クシートを作成し、空白部に入る語句の説明だけに終始する授業である。この両者に共通して使われる台詞として、「ここが大学入試に出ます。ここを定期試験に出しますので暗記しましょう」である。つまり、ほとんどの受講生は、社会科・地理歴史科の科目を社会科学として認識することをせず、地理事象・歴史事象の事象間の因果関係や論理性を追及することなく、社会科・地理歴史科の科目は暗記科目であり、暗記量の多寡により優劣がつけられ、細かい事項までを丸暗記していることが重要であると考えて模擬授業を行っているのである。

この原因は、受講生だけにあるのではなく、現在わが国の多くの学校で行われている社会科・地理歴史科の学習指導が、このような形式で行われているからであると考えられる。そのため、受講生たちが実施する模擬授業も、教科書の文言解説と「穴埋め作業」プリントの重要語句の暗記の奨励だけで終わっているのである。この原因の一つとして、高校・大学の入学試験において、丸暗記した用語を効率よく解答することが求められているためであり、入試に対応するためにひたすら地理用語・歴史用語の説明と暗記を奨励する授業がすすめられているからであると考えられる。そのため、社会科・地理歴史科の科目が社会科学であるという認識がなかなか浸透せず、地理的・歴史的事象間の因果関係や、論理性を追求する授業が展開されず、「考える社会科・地理歴史科」の授業が行われにくい状況になっていると推察される。

このことは社会科・地理歴史科の授業をする上で特に重要な視点であるので、筆者は学習指導案の作成や模擬授業のやり方の指導をする前に、社会科・地理歴史科は暗記科目ではなく、社会科学であるという本来の趣旨を説明・解説し、「暗記科目の社会科・地理歴史科」「教科書解説の社会科・地理歴史科」「重要語句の丸暗記の社会科・地理歴史科」と言う表層的な社会科・地理歴史科の考えを払拭し、科学的視点を持って、「考える社会科・地理歴史科」「論理性を追求する社会科・地理歴史科」を目指さなければならないことを指導している。

この趣旨から「考える社会科・地理歴史科」の授業を実践するための簡便な方法として、生徒に「なぜなんだろう?」「こうではないか?」「本当は!」の3段階を踏むことにより、様々な地理事象や歴史事象について、そこに存在する事象の存在理由や事象間にある因果関係や論理性を考察・理解することができることを示し、「考える社会科・地理歴史科」に結びつけることが重要であるということを繰り返し、強く指導している。

この説明・指導の後に、学習指導案作成や模擬授業実施のための「技術や作法」の指導を行っている。

1-3. 模擬授業の「技術や作法」の指導

模擬授業を行う際に必要な「技術や作法」として習得しなければならない実務的事項として、以下の6項目を意識し実践するように指導している。

- ①授業の目的の明確化
- ②適切な授業内容の立案・実施
- ③生徒の授業理解への工夫

- ④生徒の学習への意欲付け
- ⑤生徒の状況把握
- ⑥授業環境の整備

①の授業の目的の明確化については、その授業が何を目的として行われるのか、生徒に何を理解させ、考えさせることを目的にしているかを明確にしなければならないということである。このことが授業実施にあたって最重要であることを受講生に理解させる。

②の適切な授業内容の立案・実施については、①の授業の目的に沿った授業内容を立案・組み立てることが、その授業の成否にかかわる最重要事項であることを理解させる。

③の生徒の授業理解への工夫については、

- (ア) 板書が見やすく書かれているか
- (イ) 声は大きく聞きやすく、言葉はわかりやすく話されているか
- (ウ) 副教材やプリントは工夫されているか
- (エ) 授業展開にメリハリがあるか

などの技術的な事項への配慮の必要性を理解させる。

④の生徒の学習への意欲づけについては、教師が一方的に授業をすすめるのではなく、生徒の態度や表情を見ながらすすめる事の重要性や、発問・発表などの生徒の参加を考慮することが重要であることを理解させる。

⑤の生徒の状況については、生徒が活き活きと授業に参加しているか、生徒が授業を理解しているかを把握することが重要であることを理解させる。

⑥の授業環境の整備については、まず教室内が授業を行える状況になっているか、机の配置、黒板の状況などの基本的事項や、パソコンやプロジェクターなどの視聴覚機材が整理・整備されているかが重要であることを理解させる。

このような事項を説明したのち、受講生による模擬授業を実施している。これらに加えて、さらに実践的な覚書メモとして、平易な表現で以下の指導を行っている。

- ①声は大きく、話し方には抑揚をつけて。
- ②言葉は明瞭に、丁寧に。
- ③表情は豊かに、明るく。
- ④板書の文字は丁寧に、大きさとレイアウトに注意して。
- ⑤資料や小道具に工夫をして。
- ⑥黒板と教壇をフルに使って。
- ⑦教材準備には十分な時間をかけて。
- ⑧この時間で何をどのように教えるかを考えて。
- ⑨詳細な学習指導案を作成して。
- ⑩その学習指導案を「丸暗記」して。
- ⑪授業の流れと、どこで何をしゃべるかを、何回もリハーサルをして。
- ⑫さらに、豆知識や時事ネタ、ギャグを用意して。

- ⑬学習指導案やメモを見ることなく。
- ⑭常に生徒の目と顔を見て。
- ⑮教科書を教えるのではなく、教科書で教えることを意識して。
- ⑯断片的な知識を問う質問は最低限にして。
- ⑰なぜなんだろう？ こうではないか？ 本当は！ の「考える社会科」をめざして。
- ⑱十分な教材研究（指導案作り）と「しゃべり」と動きと板書のリハーサルを繰り返す行い。
- ⑲毎時間全力投球で。
- ⑳入念な事前準備が余裕と笑顔を生み出し、それが生徒の満足感と達成感につながることを理解して。
- ㉑「暗記科目の社会科・地理歴史科」「教科書の解説だけの社会科・地理歴史科」「穴埋めプリントだけの社会科・地理歴史科」を脱却して、「考える社会科・地理歴史科」を実践することによって、社会科・地理歴史科好きの生徒が増える。

以上の項目を、模擬授業演習をする前はもちろん、各人の模擬授業終了後も繰り返し指導している。

2. 模擬授業の実施方法

2-1. 模擬授業演習の回数

模擬授業の実施にあたって、2012～2014年度までは、法学部・経済学部・人文学部・経営学部の合同の授業であったため受講生が50人以上いた。そこでこの50人全員が模擬授業を行うためには、年間20回程度の模擬授業演習の時間で、1回に2～3人が模擬授業を行う方法を取らざるを得ず、しかも年間を通して受講生は1回しか模擬授業を経験することができない状況であった。そのため2012～2014年度の最終の授業で受講生からとったアンケートでは、模擬授業を2回経験したかったという意見が多数あり、解決が困難な課題として存在していた。しかし、2015年度から法学部がポートアイランドに移転したことに伴い、授業の受講者数が半減したため、受講生が多いという課題もほぼ解決され、1年に1人が2回模擬授業を実施できるようになった。

2-2. 模擬授業演習の評価

模擬授業を実施するうえで重要な要素である評価に関しては、以下の方法をとっている。

評価の観点として先述した①授業の目的の明確化、②適切な授業内容の立案・実施、③生徒の授業理解への工夫、④生徒の学習への意欲付け、⑤生徒の状況、⑥授業環境の整備の6項目に関しA～Cの3段階の評価をつけ、「良かった点」「改善すればよくなる点」を文章で記述する評価表を用いて評価をしている。そしてこの評価表を「生徒役」の受講生にも記入させ、できるだけ多くの目で客観的な評価ができるようにしている。

模擬授業終了後に、筆者が「生徒役」の受講生にその模擬授業の良かった点、改善したらよくなる点や気がついたこと、感じたこと、考えたことなどを問い、筆者がそれらに加

えて寸評をおこなっている。そして、「生徒役」の受講生はその模擬授業に関して前述の評価表を記入して、授業終了後提出することとしている。

それらを筆者が点検し、次週に「生徒役」の受講生が書いた評価表のコピーに加えて、筆者が評価を記述した評価表を模擬授業実施者に渡す方法をとっている。そのため模擬授業実施者は、他の「生徒役」の受講生が作成した評価表と、筆者が作成した評価表を読むことにより、自分の授業がどうであったのか、どこが良くて、どこが悪かったが客観的に理解できるようにしている。

授 業 評 価 表

授業実施日 年 月 日 授業実施者 ()
 単元名 ()

評価の観点	評価の項目	評 価	備 考
授業の目的の明確化	授業の目標が生徒に明らかにされているか	A B C	
授業理解への工夫	板書が見やすく工夫されているか	A B C	
	板書や文書に誤字・脱字がないか	A B C	
	声は大きく聞きやすく、言葉はわかりやすいか	A B C	
	話のスピードや抑揚は適切か	A B C	
	副教材やプリントは工夫されているか	A B C	
	授業の展開にメリハリが利いているか	A B C	
	豆知識や補足説明が適切か	A B C	
学習への意欲づけ	生徒の態度や表情を見ているか	A B C	
	発問・発表など生徒の参加が考慮されているか	A B C	
生徒の状況	生徒が生き活きと授業に参加しているか	A B C	
	生徒が授業を理解できたか	A B C	
事前準備	教材研究が十分になされているか	A B C	
学習指導案	学習指導案が適切に作成されているか	A B C	
総合評価	総合的に評価して	A B C	

*良かった点（授業内容、指導案、副教材、進め方、態度、意欲など気がついたところ）

*改善すれば良くなる点（ここは、こうすればよくなった点、こんなやり方はどうだろうと思った点）

評価者 学籍番号() 氏名()

第1図 授業評価表

この方法は既述⁹⁾したように、受講生に大変好意的に受け取られ、他の学生の評価や筆者が指摘した点を参考にして、2回目の模擬授業では1回目に指摘された点を改善して実施することができるようになった。

具体的な実施方法は、毎回3人の模擬授業実施者が1人25分程度模擬授業を行う。模擬授業実施者は、学習指導案、ワークシート、地図、史料集などの資料を受講者数分作成して、授業開始前に最前列の机の上に置いておき、筆者が用意した評価表とあわせて、「生徒役」の受講生が各自それを取っていくという形を取った。

なおこの評価表は出席表も兼ね、さらに提出物として成績算出の材料にも使用することとしたため、受講生はまじめに記述したと考える。

また、本年度は後期に受講生が減少したため、1人35分程度の模擬授業をおこなうことができるようになった。

3. 評価表の状況

授業の根幹をなす模擬授業の評価表については、先述のように、受講生は「先生役」の受講生が行った模擬授業に対して、1-3で示した各項目についてA~Cで採点する評価と、「良かった点」「改善すればよくなる点」を文章で記述することとなっている。

ここでは、「生徒役」の受講生がどのように「先生役」の受講生の模擬授業を評価しているかを示す。例として、昨年度の模擬授業演習の中で行われた、中学校歴史的分野「外国船の出現と天保の改革」と、中学校地理的分野「資源と産業」をテーマに、2人の受講生が実施した模擬授業に対して、「生徒役」の受講生が評価表に記述した「良かった点」「改善すればよくなる点」を列記した。受講生により、記述量に差があるが、率直に、真摯に評価し記述していると考えられる。なお1-3で示した各項目についてA~Cで採点する評価についてはここでは省略する。

ここで取り上げた2人の模擬授業は、2016年度に行われた模擬授業の中でも最も良好な内容の模擬授業であった。学習指導案も適切に書かれ、模擬授業全体の内容も適切で、他の受講生たちが褒めた模擬授業であった。

以下にその評価文をまとめたが、文章は受講生が書いた原文のまま転記し、「生徒役」の受講生1人が書いた文章を「 」でまとめ番号をつけた。

○中学校歴史的分野「外国船の出現と天保の改革」の模擬授業に対して

*良かった点

- ①「板書の字が大きくて良かった。声が大きくて聞き取りやすかった。生徒への質問があつて良かった。間違いをすぐに訂正していたところが良かった。進め方が上手であつた。」
- ②「授業の冒頭で前回の復習があつたので、理解しやすかった。声が大きく、聞きやすく、明るい印象でした。生徒とコミュニケーションをとっていたのが良かった。板書について、色を使い分けているのはいい工夫だと思う。」
- ③「教科書を一緒に読んでいるときに、「はい」と言って、次の合図を出していたのが良かった。」

た。発問の答えを使って、その後の説明をしているのが良かった。誤字を指摘されたあと、横に大きく書いていたのが良かった。知識もしっかり持っていて、それを生徒に伝えていたのが良かった。日付や教科書のページが板書されていて、生徒が読み直したときに、思いだせるようにしていた。」

- ④「板書にページを記入することで、ペースが遅い生徒もついていけると思った。机間指導が丁寧に行えていたので、生徒が考える時間が取れており全員が参加できていたと思う。」
- ⑤「『教科書を開けてください』などの細かい指示があってわかりやすいと思う。教科書を読ませているときに、「はい」などの言葉があって、読みやすいと思った。「自分ならどう思うか」という自由な意見が認められる発問をしていたので、生徒は発言しやすいと思う。重要語句の色を変えて板書する配慮があった。指導案がとても綿密に作られていて、しっかり授業に反映されていた。補足説明が分かりやすく、教材研究をしっかりしていることがよくわかった」
- ⑥「間違った字をその場で訂正し、その横に大きい字で書いていたので、分かりやすかった。生徒が家に帰ってノートを見たときに、理解できる板書であった。」
- ⑦「教科書に書いてあること以外の知識もあった。板書も重要な点を色分けしてあり、分かりやすい。」
- ⑧「生徒への発問のとき、生徒が分からないような様子であることに気がつき、ヒントを与えていた。難しい漢字を大きく板書していた。板書や教科書に書いてあるところだけを説明するのではなく、関連がある人物や出来事について、豆知識のような説明があった。」
- ⑨「板書事項にルビがふってあり分かりやすい。明るい授業であった。」
- ⑩「最初に復習を少し入れていた。机間指導ができていた。話し合いをやめるときに、「顔を上げてください」と一言あった。」
- ⑪「声が大きく聞き取りやすかった。生徒への発問が良かった。生徒の意見を大切にしていた。机間指導ができていた。板書で、色チョークが適切に使われていた。机間指導や前で説明するときも、生徒の様子をよく見ていた。声量もよく、言葉もハキハキして聞き取りやすかった。資料も用意され、進行もスムーズであった。」
- ⑫「大きいはっきりした声で聞きやすかった。生徒の様子をしっかり見る机間指導があった。黒板の最上部に日付とページが書かれていたので、あとで生徒がノートを整理しやすい。詳しい指導案の書き方で、私でも授業ができると思った。説明が多く、たくさん調べられている。生徒への配慮がされている。」
- ⑬「生徒が後から復習するのに、教科書のページ数が分かりやすく書かれていた。「どういう気持ちか」と生徒に聞いていたので、生徒一人ひとりが考えられる発問であった。説明で難しい言葉があまり使われていなかった。」
- ⑭「今日、教科書のどこをやるかを黒板に明示していた。板書が色分けをされていて、分かりやすかった。生徒のノートの書き写しの状況を確認していた。指導案がよくできていた。」

- ⑮「導入が良かった。話しかけるような場面が多かった。ルビがふられていた。板書が色分けをされていた。元気があってよい授業だった。」
- ⑯「「考えさせる授業」が作られていた。適切な指示が出されていた。」
- ⑰「板書に教科書のページ数が分かりやすく書かれていた。グループワークの時、生徒とコミュニケーションが取れていた。自分が間違っただけを、大きく書いて訂正した。」
- ⑱「教科書を読ませるとき、生徒の横にしながら一緒に読んでいた。板書が工夫されていて、難しい漢字にフリガナもつけられていた。生徒に考えさせるときも、生徒と一緒にコミュニケーションをとっていた。豆知識も豊富であった。」
- ⑲「声が大きくハキハキ話していたので、聞きやすかった。漢字間違いをして訂正するときに、大きい字で書き直す対応ができた。親近感のある話し方ができた。生徒が答えたことに、きちっと反応できていた。机間指導がよくできており、その際生徒に話しかけることもできていた。」
- ⑳「生徒の名前を覚えていて、発問できていた。ノートがまとめやすい板書であり、生徒が家で復習しやすく書かれていた。」
- ㉑「話し方が丁寧であった。難しい漢字を大きく書いていた。説明がたいへん上手で分かりやすかった。きっとたくさん事前勉強がなされていたことが分かった。」
- ㉒「声がしっかり出ていて、覇気があった。机間指導のとき、グループに入れない生徒への対応ができていた。難しい漢字にルビがふられていた。説明がすごく丁寧であった。難しい漢字を大きく書いていた。」
- ㉓「教科書・資料集をどう開くか適切な指示があった。色チョークが適切に使われていた。ハキハキとはっきり話していた。机間指導がよくできていた。黒板がよく見えるよう、横切るときにかがんでいた。」
- ㉔「スムーズに授業がすすめられていた。板書が大きく、濃く書かれていた。教科書を読ませるとき、生徒のそばに立っていた。難しい漢字にルビがふられていた。いろんな場面で生徒への配慮があった。資料の準備もよくできていた。」
- ㉕「導入部で前時の復習から入ったので、展開が円滑になった。教科書を読ませるとき、生徒の側に立っていた。発問に対する生徒の答えへの対応が適切だった。全体にいろんな場面で生徒への配慮があった。」

***改善すればよくなる点**

- ①「説明の時にもっと明確にした方がよい。」
- ②「誤字があったので正確に書く必要がある。説明が不十分な所があったので、深い説明が必要だ。」
- ③「少し説明が不十分。板書をする際に、もう少し丁寧に書いた方がよい。色を使うと全体の板書がきれいになるので、もっと使ってもよいと思う。板書の内容が希薄だったので、生徒が板書をあとから見て復習できるぐらい内容のあるものにした方がよい。」
- ④「字の大きさを統一したり、題名は少し大きく書くなど、メリハリをつければもっと見やすい板書になる。」

- ⑤「一つずつもう少し細かい説明をすればさらによくなる。」
- ⑥「板書の文字のバランスをもう少しよくすると見やすくなる。漢字の書き順を正しく。」
- ⑦「気になるところはあまりなかった。」
- ⑧「誤字があった。板書で、行間をあけると読みやすくなる。」
- ⑨「生徒が答えてくれたことは、少し的外れであっても、元気よく復唱をし、相槌を打った方がよい。中学生には少し説明が多いかと思う。説明を整理しないと50分では終わらない。板書の文字の大きさを統一した方がよい。」
- ⑩「板書の表題と内容の境目が分かりづらい。」
- ⑪「発問が少ない。板書をもう少し丁寧にならねばよい。」
- ⑫「正しいチョークの持ち方を知った方がよい」
- ⑬「板書の文字が見づらい。」
- ⑭「フエルトン号事件の説明が不十分」
- ⑮「誤字があった。説明の時、もう少し整理をしてから話をした方がよい。」
- ⑯「資料や地図をもっと使えばさらに良くなる。」
- ⑰「板書の行間をもう少しあけた方がよい。」
- ⑱「文字をもう少し丁寧に書く。板書に①②③やA B C、I IIなどを使えばよい。」
- ⑲「句読点の丸で区切って読ませることよりも、意味が繋がっている文は続けて読ませても良いのではないか。早口になるところがあった。」
- ⑳「生徒の答えに対して、もう少し突っ込んだリアクションをしてあげたらよい。声の強弱が若干ついていたが、もう少し大きな声で話したらよくなる。」
- ㉑「教科書の記述と板書は異なっていた。」

○中学校地理的分野「資源と産業」の模擬授業に対して

*良かった点

- ①「声がとても大きくて聞き取りやすかった。板書に工夫があって見やすかった。机間指導ができていた。」
- ②「声が大きく聞き取りやすかった。板書も丁寧で、色を使い工夫されていてよかった。授業の目的が明確で良かった。机間指導ができていた。生徒に考えさせる発問がよい。生徒の方を常に見ていた。色々な想定をして授業を進めていた。」
- ③「大きな声ではっきりと話せていたので、とても聞き取りやすかった。黒板の字のバランスがよかったので、読みやすかった。すごく楽しそうに授業をしていたので、退屈しなかった。」
- ④「声が大きく周りをよく見ていたので、聞きやすく、学ぼうという気持ちが高まった。問かけの仕方が自然で、生徒が答えやすかった。机間指導が丁寧にされていた。」
- ⑤「元気がいっぱいあった。黒板の使い方が上手だった。発問の答えが皆にわかるように、繰り返して大きな声で言っていた。説明が上手で分かりやすかった。授業の内容が頭に入っていて、スムーズに進められた。」
- ⑥「元気があってよかった。机間指導ができていて、生徒に駆け寄っている姿もよかった。」

生徒の様子を見ながら説明を始めており、生徒想いでいいと思った。生徒が考えているときに、コミュニケーションをとって良かった。」

- ⑦「声が大きくて良かった。一つ一つの説明が丁寧であった。問いかけが多くて良かった。」
- ⑧「発問もあり、生徒が積極的に授業に参加していた。授業を行っている本人が楽しく授業をしているのが伝わってきた。声が大きくて、メリハリがあった。机間指導時に、声掛けがしっかりできていた。」
- ⑨「声のトーンにメリハリがあった。話し方がきはきしていた。板書させるだけでなく、しっかり説明も付け加えられていた。生徒と積極的にコミュニケーションを取っていた。」
- ⑩「声の大きさがとてもよく、聞き取りやすかった。机間指導がしっかりできていて、注意などもおこなっていた。字が丁寧に書かれていた。しっかり生徒の方を見て授業が展開されていた。発問をして、参加型の授業がなされていた。重要な所は、色が使われていて、工夫が見えた。」
- ⑪「声が聞き取りやすく、声量も良かった。机間指導ができていて、生徒に呼びかけたり、様子を見たりできていた。発問もよくできていた。」
- ⑫「声が大きくてよい。音読の進め方を説明していたので、迷わなくて良かった。「句読点読み」で区切りごとに「はい」と言っていたので、読みやすく、きちんと教科書を追っていると思った。机間指導が、ただ周るだけでなく、声掛けもできていた。」
- ⑬「声のスイッチが入ると大きくて聞き取りやすかった。話すときに、ちょっとしたボディランゲージがあつて良かった。生徒と一緒に授業を作ろうとする雰囲気があった。生徒への発問が多く、退屈にならない。」
- ⑭「声が大きくて良かった。説明が上手であった。発問が、知識を問うものではなく「考える問題」がされていた。」
- ⑮「声が大きくて良かった。考えさせることができていた。板書に、区切りがありよく理解できた。授業進行で、適切な指導ができていた。準備がよくできていた。生徒の表情を見ることができていた。」
- ⑯「声が大きく元気があつて良かった。机間指導で生徒とコミュニケーションがあった。授業の展開で、区切りがあった。語りかけて授業に興味を引くようにできていた。」
- ⑰「大きい声で、ハキハキしていたのが良かった。楽しそうにしていたので、こちらも「授業を受けよう」という気持ちになった。板書の字も丁寧に見やすく、カラーも使っていたので良かった。机間指導も適切だった。話し方も良かった。説明もわかりやすかった。」
- ⑱「声が大きく、ハキハキ話していたので、とても聞き取りやすかった。字も丁寧に、色使いもよく、板書は見やすかった。発問が多くて良かった。発問以外での生徒とのコミュニケーションが取れていてよいと思った。」
- ⑲「声が大きくハキハキ話していて、聞き取りやすかった。板書の字の大きさも見やすかった。生徒に積極的に話しかけて参加する機会が多く取れていた。机間指導がしっかりな

されていた。生徒の方をしっかりと見ながら話すことができていた。」

- ⑳「声がハキハキして聞き取りやすかった。教科書を読みますとき、文と文との間で「はい」と言って区切りをつけていたのが良かった。何をポイントにするのかがわかりやすかった。」
- ㉑「本当に生徒に話しかけているみたいで、優しい感じも良かった。声が聞き取りやすく、話し方も丁寧だった。例が多くてわかりやすかった。話し合いの時、自ら生徒と話し合っていて、机間指導もしっかりできていた。」
- ㉒「声が大きく、生徒が気持ちの切り替えがしやすい声だと思った。発問がよくされていた。生徒皆が楽しく授業に取り組んでいた。個人の名前を呼ぶことで、きちんと聞いているかなどの確認ができていた。机間指導がしっかりとできていた。黒板の使い方が良かった。」
- ㉓「元気すぎるくらい、はきはきと授業ができていた。板書を強調しながら説明できていた。生徒の参加が促されていた。きちんと授業の構成や次回のつながりまでがよく考えられていた。」
- ㉔「声が大きくて聞き取りやすかった。強弱もついて、メリハリもあった。生徒への配慮がよくできていた。日付や教科書のページが板書されていて、わかりやすかった。キーワードを示すやり方が分かりやすくて良かった。机間指導がよくできていた。発問した際に、生徒のそばに近づいているのが良かった。」
- ㉕「声はとても通る大きさであったので良かった。板書の字はとても見やすかった。大きさも適度なサイズであった。抑揚、メリハリがあって、とても聞き取りやすかった。机間指導がとても丁寧だった。」
- ㉖「声がハキハキして聞き取りやすかった。生徒がノートを書いているか確認できていた。生徒を想定して、話す言葉も、です・ます調のときと、フランクなときを上手に使い分けてできていた。準備が前から十分してあったことが、ひしひしと伝わってきた。」
- ㉗「声がハキハキし、とても大きくて聞き取りやすかった。生徒への発問に対する返答に関する反応が気持ちよかった。机間指導の時、たくさんの生徒に声掛けができていた。発問が多くあった。」

***改善すればよくなる点**

- ①「板書の字を丁寧に書く。」
- ②「話し方を少し直す。」
- ③「地図があればわかりやすい。」
- ④「言葉遣いをもう少し丁寧にする。」
- ⑤「上から目線の場面があった。」
- ⑥「授業のスピードが速い。」
- ⑦「板書はシンプルで見やすいが、あとから見直した際には少しわかりにくい。」
- ⑧「個人の家庭の職業を尋ねることは、注意が必要である。」
- ⑨「板書で色チョークを使えばよい。」

- ⑩「もう少しゆっくり話せばわかりやすい。」
- ⑪「フレンドリーなのは良いが、話し方が碎けすぎてしまわないよう、注意が必要である。」
- ⑫「自然環境の制約がなぜグローバル化とつながるのか、わからなかった。」
- ⑬「板書が簡潔にまとまりすぎている。」

4. 受講生による評価表の記述部分について

2016年度に行った模擬授業の中で、受講生からの評価が高かった2つの模擬授業に関する評価文を上述したが、ここではこれらの評価文について検討を加える。

- ①ほとんどの受講生が他者の模擬授業について、良好な点と不十分な点を峻別し、的確に、客観的に評価できており、自らが習得しなければならない「技術と作法」を理解している。
- ②例に示した2つの模擬授業は完成度が高く、評価の高い活動がたくさんできたと多くの受講生が認識している。また模擬授業をするにあたって筆者が指導した数々の技術や注意事項などの「技術と作法」が、的確に生かされた模擬授業ができていることを多くの受講生が理解している。
- ③「暗記科目としての社会科」ではなく、「考える社会科」の視点に立った授業のやり方を、他の受講生の良好な模擬授業を見ることにより理解できたと評価している受講生が多い。
- ④模擬授業を見ることにより、授業全体を適切に構成する方法・手法を会得した受講生が多い。
- ⑤模範的な授業をするためには、綿密で周到な学習指導案を作成しなければならないことや、事前に十分に時間をかけた教材研究や練習がされなければならないことを、多くの受講生が自覚している。
- ⑥授業を行う上で最も基本的な活動である、生徒への学習への興味付けや、生徒参加型の授業を作ることが重要であることを理解した受講生が多い。
- ⑦実際に授業を行う上で必要な、「声の大きさ」、「言葉づかい」、「明るい表情」、「楽しそうに進める」、「元気一杯で進める」、「生徒の方を見る」、「見やすい板書」、「机間指導」、「教科書の読ませ方」、「ワークシートの作り方」、「授業のスピード」、「発問の内容と仕方」、「各活動の時間配分」などの細かい実践的・技術的な事項について、模擬授業を見ることにより、多くの受講生が詳細に認識し習得していると考えられる。

以上のように、受講生全員が「先生役」になり、模擬授業を実施し、他の受講生が「生徒役」になって、模擬授業演習に参加することにより、授業を進めていく上で必要とされる必須事項はもとより、諸々の細かい事項や技術や意識・意欲に関して、実践演習を通じてそれらを習得して、自らの授業に取り入れなければならないということをよく理解していると考えられる。

まとめと今後の課題

- ①筆者が社会科・地理歴史科教育法において行っている模擬授業演習について、その位置付け、やり方の指導方法、「技術や作法」の指導、実施方法等を示した。
- ②「先生役」の受講生が行う模擬授業を評価することにより、「生徒役」の受講生が、自らが授業を行っていく上で習得しなければならない種々の「技術や作法」を身につけることができていることを示した。
- ③特に受講生から評価の高かった模擬授業からは、多くの受講生が授業を行っていく上での種々の「技術や作法」をたくさん吸収し、自己の模擬授業に反映させようとする積極的な姿勢がよく見られる。
- ④上記の視点から、模擬授業演習に際して、受講生に評価表を作成させることが有効な指導方法であると考えられる。
- ⑤社会科・地理歴史科教育法では、教室で授業をする「技術と作法」を習得することが主たる目的であるため、模擬授業演習を重ねることにより、教育目標に近づくことができると思われる。
- ⑥年間の授業回数と受講者数の関係から、受講生が1年に2回模擬授業をするためには、1回に3人が25分程度の模擬授業しかできないため、50分の授業を行うための「技術や作法」の習得には対応できていない。
- ⑦⑥の問題点を解消するには、1講座の受講者数を現在の半分にすれば、1人が50分の模擬授業を実施することができると考えられる。筆者は本務校において担当している授業では、1講座の受講生数が10人以下であるため、1人45分の模擬授業演習を2回することができており、学習効果を上げるためには、受講生数の調整が望ましいと考えられる。
- ⑧今回は、社会科・地理歴史科教育法の指導方法の2つの柱である模擬授業演習と学習指導案の指導のうち、模擬授業演習だけに検討を加えたが、もう一つの柱である学習指導案の指導についても、模擬授業演習と密接な関係を持っているので、今後研究を進める必要がある。
- ⑨この模擬授業演習の指導法に対しては、受講生の満足度も高く、積極的に授業に参加している受講生が多く、また将来社会科・地理歴史科教員になろうとする意識・意欲の向上にもつながっていると考えられる¹⁰⁾。

註

- 1) 服部一枝 (2016) : 国語科教育法 ―実践的指導力の育成に向けて― 開智国際大学紀要15号 pp75-93
- 2) 長谷川望 (2016) : 模擬授業及び振り返り方法の検討 東邦学誌第5巻第2号 pp99-107
- 3) 大前暁政 (2015) : 教育方法と授業技術を意識化させ、習得させるための「教育方法論」の実践 京都文教大学 教師学研究16 pp1-16 京都文教大学
- 4) 小松伸之 (2016) : 社会科教育法における世界遺産の教材化と模擬授業の実践 東京成徳大学研究紀要 23 pp193-203
- 5) 太田正行 (2015) : 模擬授業を活用した「社会科・地理歴史科教育法」実践報告 教職研究第27号 (臨時増刊) pp37-43

- 6) 木下百合子 (2012): 社会科教育法における模擬授業 教科教育学論集 9-12 pp9-12
- 7) 岩野清美 (2014): 教職科目において学生の居場所感がたかまる要因に関する探究的研究 —2013年度「社会・地歴教育法」を事例として 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要 24 pp131-139
- 8) 拙稿 (2016): 社会科・地理歴史科教育法の内容と受講者の意識 神戸学院大学 教職教育センタージャーナル第2号 pp27-39
- 9) 拙稿 (2016): 前掲書8) pp38
- 10) 拙稿 (2016): 前掲書8) pp36

本稿を神戸学院大学で授業を行う機会を与えていただいた、今西幸蔵先生に謹呈させていただきます。